所変われば品変わる　(1)

皆さんご存知の諺、「所変われば品変わる」。
インドネシア語では
Lain ladang, lain belalang.　(田んぼが違えば、蝗も違う)、
Asing lubuk, asing ikannya.(深さが違えば、住む魚も違う)と比喩的に言うが、要は「国が違えば習慣が違うのだ」ということ。

これが、言葉はわかっても、実際には身体で理解できないものである。また、巷ではカルチャーショックと言われるものにもなる。平安時代の貴族ではないが、自分で知ろうともせずに、知らないことは存在しないと自分自身を納得させ、自分の知っていることだけを規範として物事を判断する。まあ、そんな難しいことは言わずに、インドネシアと日本では物事を比喩するとき、どんな違いがあるのだろうか、目につく例をあげてみることにしよう。

☆　☆　☆

世は将に健康ブーム。政府までメタボリックシンドロームといって庶民を脅かしては、腹の出た奴から割高の健康保険料をむしり取ろうとしている。庶民は如何にしてスマートになろうかと日夜、ダイエットとか痩身器具とかトレーニングジムに金を費やしている。
ところで「身体がキュウリのようだ」といえば日本では痩せっぽちだが、“Badan anak itu seperti mentimun rupanya”　(その子は身体つきがキュウリのようだ)といえば、健康で太っているという意味になる。Percaya atau tak percaya（信じようと信じまいと)、日本のキュウリは細くて長いが、インドネシアのキュウリは奈良漬の瓜みたいに太いのである。そう、健康優良児なのである。

「沈黙は金なり」はよく知られている言葉だが、その後に「されど雄弁は銀なり」と続くのはあまり知られていない。沈黙は金の時もあれば、tak ada sama sekali　の時もある。されど雄弁は常に銀、即ち２番目である。常に２番をとっていれば合計では必ず１番になるだろう。インドネシア語で
“Air tenang tetapi menghanyutkan.”(水は静かだが流れている＝黙っている人はたくさん知っている)という諺がある。Omong Kosong（嘘ばっかり）の多い国だけに頷ける。

「雲泥の差・月とすっぽん」、平たく言えば「天と地ほどの開きがある」ことになるが、インドネシア語では “Seperti sayur dengan rumput.” (野菜に対する泥）とか　“Seperti siang dengan malam.”(昼と夜)とか “Seperti bumi dan langit.”(地と空)と平凡な比較になっている。これに対して日本のは「似て非なる」物を引き合いに出し、禅問答みたいでずっと面白い。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」。インドネシア語ではどうか。けっこう哲学的なところがあって、“Bak ilmu padi, kian berisi kian runduk.”（稲穂の摂理として、実るほど頭を垂れる)と、全く同じである。さすが米を主食としている民族同士である。

「猫に小判」、「豚に真珠」。　インドネシア語ではいろいろな表現がある。曰く“Seperti kera dapat bunga.”(猿に花), “Kodok dapat bunga.”(蛙に花), “Seperti kera diberi kaca.” (猿に眼鏡をやる）等々、いずれも価値が分らぬということを表している。しかし、驚くなかれ、“Memberi mutiara pada babi.” と文字通り日本の「豚に真珠」と、全く同じ例文も目にしている。ひょつとしたら、日本人が教えたのではないだろうか？

日本では「砂糖に群がる蟻」とでもいおうか、「女のいる所に男が集まる」ということを表現するのに “Ada bangkai, ada héring.”（死体のあるところ、禿たかがいる）とも言う。ここに醜業婦に群がる男どもを蝿並にさげすんでいる文化があると言ったら言い過ぎだろうか？　そういえば、ジャカルタでは Pembantu(お手伝いさん)が醜業婦を蔑んでいたのを記憶している。　(W)